

# 愛知 図書館協会々報

## 特集 災害と図書館 —東海北陸地区公共図書館研究集会報告—

地震や水害、火災などの災害は図書館にとっても避けては通れない問題です。平成23年に未曾有の被害をもたらした東日本大震災、平成28年に発生した熊本地震などの大規模災害は記憶に新しいところであり、また、近い将来、南海トラフ巨大地震などの発生が危惧されています。

「災害と図書館」というテーマで開催された平成29年度東海北陸地区公共図書館研究集会を振り返りながら、災害と図書館について考えます。

### ■平成29年度

#### 東海北陸地区公共図書館研究集会について

当研究集会は、平成29年10月24日(火)、25日(水)の2日間にわたり、名古屋大学減災館と愛知県図書館を会場に開催された。この会は、東海北陸地区公共図書館協議会に加盟する県立図書館6館と名古屋市鶴舞中央図書館の持ち回りで開催しているもので、今年度は愛知県が担当した。東海北陸6県から、82名の参加者(1日参加も含む)があった。

1日目は、名古屋大学減災館見学及び基調講演が行われた。2日目は、2つの事例発表の後、それを受けて研究討議が行われた。

#### 名古屋大学減災館見学

まず、名古屋大学減災連携研究センター強靱化共創部門特任准教授の倉田和己氏の解説により、名古屋大学減災館の見学を行った。

名古屋大学減災館は、減災研究推進の場、地域の備え実現の場、巨大災害発生時の対応拠点の場、という3つの機能を持つ、減災社会の実現のための施設である。平成26年3月の開館以来、5万人以上の見学者



を迎えている。

地下は免震装置の実物を見ることが出来る免震ギャラリー。1階は各種の教材で地震被害が体感できる減災ギャラリーなどからなる「学び」のフロア。2階は「調べ」のフロアであり、減災ライブラリーが設置されている。そして、屋上には、大振幅長周期の揺れを再現する屋上実験室がある。減災ギャラリーにおいて、熊本地震の、実寸の揺れを再現していただいた。2日目に熊本地震についての事例発表が予定されており、事前にそのイメージをつかむことができた。

減災ライブラリーは、地震・災害に関する様々な資料について、保存・提供を行っている。災害や防災に関する書籍のほか、名古屋大学災害対策室が10年間にわたって集めた災害に関する新聞記事のスクラップを見ることが出来る。その他、東海4県市町村の県史・市町村史、ハザードマップ、地域防災計画などを揃えている。県史・市町村史には過去に発生した地震・災害の歴史や記録が編纂されており、防災を考える上でも大変有用だとのことであった。

#### 基調講演 「歴史と地域に学ぶ震災対策」

次に、名古屋大学減災連携研究センター長・教授の福和伸夫氏による基調講演が行われた。

人は見たくないものは見ないものだが、見たくないものを見るべきであり、過去の地震の記録から今後起こりうる地震について知ることが大切である、というお話であった。

9世紀に相次いで起こった大地震と、近年の大地震状況が似通っているということである。『日本三大実録』

など当時の書物に詳細に記されている、大地震の際に起きた凄惨な状況が示されたが、私たちは今それを我が事として捉えているだろうか、と考えさせられた。また、戦国時代や幕末、太平洋戦争など過去の歴史的事実に、当時の地震発生状況を重ねてみると、大地震が歴史に大きな影響を与えているということが納得できた。

南海トラフ巨大地震は、今後30年間で70%の確率で発生すると言われおり、甚大な被害が予想されているが、私たちはそれをちゃんと見ようとしているだろうか。過去の歴史から、将来起こることを学ぶために、災害にまつわる過去の資料を保存し、人びとに伝えていく図書館の責務の重大さについて考えることができる基調講演であった。



### 事例発表① 「平成28年熊本地震に係る 県立図書館の被害及び復旧の取組状況」

2日目はまず、熊本県立図書館情報支援課長の欄杭正義らんぐい氏に、事例を発表していただいた。

熊本地震は、震度7の地震が28時間以内に2回発生するという、観測史上例を見ない地震であった。県内20市町村で震度6弱以上を観測し、また、余震回数は4,100回を超えた。これにより、多数の家屋倒壊や土砂災害など、甚大な被害が発生し、県内公共図書館



も、多くの館が休館を余儀なくされた。

熊本県立図書館では、所蔵資料の7割が落下し、閲覧室のガラスや照明の破損、書架の移動やゆがみなどの被害があった。4月15日から5月31日まで休館とし、その後、被害の少なかつた箇所から徐々に開館し

ていった。復旧作業として、資料を元に戻す、資料の修理及び書架整理、古文書の破損など状態調査、の順に行った。被害や復旧作業について詳しくお話いただき、同様のことが自館で起こった場合どのようにすべきか、考える契機となるお話であった。

### 事例発表②

### 「災害から資料を守り、救うために」

次に、日本図書館協会資料保存委員会委員長・東京都立中央図書館の眞野節雄しのの氏にお話をいただいた。

冒頭、図書館資料は文化財ではないが、地域資料などは他では手に入らない地域の宝である、図書館が被災したとき、図書館員にその地域の宝を救う気持ちがあるか、という問いかけがなされた。

資料の災害対策についての各機関での具体的なマニュアルはほとんどないのが現状だが、東京都立図書館では、資料救済に特化した「資料防災マニュアル」を作成している。その特徴として、①資料が受ける被害からマニュアルを作成したこと、②水濡れ、落下による資料破損、ガラス飛散に対する緊急度は同一ではないことを明記したこと、③水濡れ資料の対応について、塗工紙への対応に着目したこと、が挙げられる。水濡れは、水害、漏水、火災時の消火など様々な場面で起こり得る被害であり、カビの発生を引き起こすために緊急度が高い。雑誌や口絵などに多く使用されている塗工紙は、濡れると貼り付き、乾くと固着して剥がしにくくなるという問題がある。これに対応するには、第一に資料を乾かさないこと、すぐに処理できない場合は、冷凍や脱気(脱酸素)処理法により時間稼ぎをすることが必要だとのことである。これらのことは、動画「被災・水濡れ資料の救済マニュアル」に分かりやすくまとめてあり、東京都立図書館のホームページから見ることができる。

実際に被災した場合、何を救って何を廃棄するのか、優先順位をつけて考えることが大切だということである。また、大規模な災害に見舞われ、自分たちだけでは手に負えない場合、助けを求めることが重要だとのことであった。地元の県立図書館や日本図書館協会図書館災害対策委員会に相談する、といった方法が考えられる。

東日本大震災で津波被害にあった陸前高田市立図書

館の郷土資料は、被災から1年経って発掘され、修復された。その修復に関わった講師の、「資料は残そうと思わなければ残らない」という言葉が印象的であった。

## 研究討議

その後、パネリストとして、事例発表者2名に加え、名古屋市鶴舞中央図書館奉仕課長の加藤晴生氏をお迎えし、研究討議を行った。

これから災害に見舞われるであろう地域を代表し、加藤氏からは、名古屋市での防災対策、所蔵資料を使つての啓発活動などについてお話があった。

会場からは、図書落下防止テープの効果や、被災時の県立図書館が行う県内公共図書館からの情報収集方法、手書き原稿の補修方法など、多岐にわたる質問が出され、災害に対する関心の高さが伺えた。



## ■むすびにかえて

南海トラフ巨大地震を始めとして、私たちは、いつ災害に見舞われるか分からない状況に置かれている。利用者を守り、また、資料を守るために、図書館としてどう備えておけばよいのか、多くのことを学ぶことができた。また、過去の災害について記された資料を将来伝えていく、図書館の責任の重さを再確認することができた研究集会であった。研究討議において眞野氏が語られた「できるところからまず始める」という姿勢を大切に、減災に取り組んでいきたい。(事務局)

## 東海北陸地区公共図書館研究集会に参加して

半田市立図書館 戸田豊志

初日にはまず名古屋大学の減災館を見学した。すべてを振動させることができる構造の建物。館内で揺れを体験する生々しい映像を見た。地震に遭うとどうなるのかを実感できた。

福和氏の基調講演は「シン・ゴジラ」など最新の映画の話からはじまった。「シン・ゴジラ」の最初20分を見れば、災害が起きたとき、日本がだめなのかがわかる、と断言された。首都圏の人すべてを移動するのに、計算すると1か月ほど必要であるとか、富士山は300年以上噴火をしなかったことがないが、本当に大丈夫なのか、と参加者に統計値や年代、歴史などについての質問を交え、多くの実例を挙げて、災害への備えが大切であることを解説。また、歴史の転換点と災害との連関はいくつもあり、歴史は英雄など人で語るだけでなく、災害による影響についても考察すべきだとの意見も興味深かった。

2日目、櫛杭氏の発表では熊本地震の図書館における被害状況の写真を多く示され、改めて地震の恐ろしさを実感した。ことに自動化書庫を導入していた図書館が中に入ってゆけなかったとの報告に、新しいものを導入する場合には様々な角度から検討しないとけないと思った。

眞野氏の発表では、水に浸かってしまった本をさらに真水につけてから処理する方法に興味をひかれた。図書館が水びたしになったときを想定してのきびきびとした避難訓練の映像に、実際に起きてしまう前の心構えが重要だと感じた。

研究討議では、加藤氏が、名古屋市鶴舞中央図書館への河村市長からのレファレンスにより、それまでの津波の高さ想定2.5mが正しいかを調べ直した結果3.6mであるとわかり変更されたと発言されたのが印象に残った。また、歴史資料が現在の災害情報として直接役立つことを強調されており、地域資料の収集保存が重要だと改めて認識した。

眞野氏の語られた、泥だらけになった本の中から貴重な郷土資料をどうにかして救い出したいと考えた被災地の図書館員がいて、なんとか復元することができたとのエピソードには涙が出そうになった。

質疑では、本の落下防止テープについての質問に対し、眞野氏が、本が落ちないことで書架自体が重さで倒れやすくなる可能性について触れていた。多くの図書館員が知っておいたほうが良いと思う。

初日のプログラム終了後、情報交換会が開催された。遠くからの参加者も多く、和気藹藹とした良い会であった。

## 名古屋市図書館の災害対策について

名古屋市鶴舞中央図書館 加藤晴生

### ■はじめに

平成23年3月の東日本大震災以後、本市図書館において市域の古い地図を閲覧する利用者が急増した。自分の住んでいる、あるいは住む予定の地域がどのような場所であったか知りたいというのである。また、同年4月には市長からレファレンスとして「本市防災対策における堤防の高さは現在2.5mの津波を想定しているが2.5mで本当に大丈夫かと感じている。2.5mを超える津波が本当になかったのか、昔の記録を調べてほしい。」と依頼された。市の防災対策に図書館も役立つことができると感じ、以後図書館の蔵書を活用し災害に対する市民向け啓発を行うことを柱とした計画を立てることとした。「市民の生活に役立つ図書館」を掲げる本市図書館の基本構想に基づいたさまざまな施策のひとつとして「防災」をキーワードに市の関係部局との連携や市民向けの啓発資料の作成及び講座の開催などに取り組んでいる中、この度の研究集会において「これから地震が起こる地区」という穏やかではない地元の代表として、本市図書館の災害対策について述べる機会を得た。

### ■図書館施設の耐震化

本市の21図書館は全市的な対応の中で施設の耐震化またはリニューアル改修等を順次進めている。改築が済んでいない千種図書館など数館が耐震化に未対応である。また、館内の書架や什器等家具類の固定は完了しているが、書架の図書落下対策はしていない。それぞれの図書館での落下対策が本当に必要か、必要ならその方法及び範囲について今後検討しなければならない。

### ■コンピュータシステムのデータ保存

本市の21図書館を結ぶオンラインシステムは、約67万件の利用者データ、約280万件の書誌データ、さらに約400万件の資料データと、それらを結ぶ貸出データや予約データを保有している。毎日のデータ保存を実施しつつ、保存した記録媒体を月1回の頻度で業務委託して東海地方以外のデータ保管施設へ輸送し保管している。万一の広域災害時に伴うデータ損失の場合、ハードウェアさえ復旧すれば最悪でも1か月前のデータ状況が再現可能である。

### ■過去の災害から学ぶ

図書館の最も大切な役割として、冒頭に述べたとおり図書館資料を活用し市民への啓発活動に取り組んでいる。地震に対する準備として必要となるのは、

- 1.自分たちの住む土地の成り立ちを知る
- 2.過去に起きた災害を知る
- 3.職場や自宅付近の被害想定を正しくイメージすることと言われ、そのうえで耐震化等の対策を進める必要がある。本市は市民向けの防災啓発資料として各区ごとに地震や津波のハザードマップを作成し各戸配布しており、これらは当然ながら各区の図書館でも所蔵し、市民がいつでも閲覧できるようにしている。

また、災害歴史記録の調査により収集した資料をまとめたポスター「歴史災害からみる名古屋」を作成した。これは江戸時代、戦前、戦後の各時代における災害記録調査から得られた主な災害の被害状況に関する記述や写真、災害に関する逸話、地名に関する言い伝えなどを紹介し、関係場所を地図上に示したもので、これを作成するにあたっては、鶴舞中央図書館の資料を活用している。

そして、各区役所が各区ごとに土地の成り立ちや地名の由来、過去の災害の状況や対策等を記載した防災マップを作成する際も、鶴舞中央図書館および各図書館の資料を提供し編集に協力した。これらは「過去の災害から学ぶ名古屋」と題して冊子にまとめられ、本市公式ウェブサイトでも情報提供している。

過去の災害に関する歴史的資料の多くは鶴舞中央図書館で所蔵しているが、伊勢湾台風に関しては本市の南図書館に「伊勢湾台風資料室」があり、被災時の様子がよくわかる多数の写真パネル、避難状況の詳細な記録などを所蔵している。

### ■陸前高田市への司書派遣

岩手県の陸前高田市の新図書館が7月20日にオープンした。被災後、陸前高田市へは本市の河村市長が「まるごと支援」を打ち出し、市政全般にわたり担当職員を派遣して復興を支援してきたところであるが、この度新館オープン準備のため経験豊かな司書の支援が必要との依頼を受け、4月末に本市図書館の司書1名を陸前高田市へ派遣した。現地の勤務で多くを学び、10月末に派遣期間を終え帰名する。その経験を今後本市図書館の災害対策に活かしてもらえると期待しているところである。

## 会員館最近の話題から

### 図書館婚活イベント

#### 「としょ♥コン～本でつながる出会い～」

岡崎市立中央図書館 天野幸枝

平成29年12月、岡崎市立中央図書館では昨年度に続き第2回「としょ♥コン」を開催した。当イベントは、平成27年度に実施した当館利用者アンケートで、20代、30代の利用者の割合が他の年齢層に比べ少ないという結果（20代は7.3パーセント、30代は20.1パーセント）から、この年齢層の新たな図書館利用者を増やすために企画したものである。

今回の対象は、岡崎市内在住・在勤の26歳から45歳までの本に興味のある独身勤労者とし、36歳未満と以上の2部制にし、募集定員は各回男女8名ずつとした。申し込みは「あいち電子申請システム」を利用した。入力フォームでは「ニックネーム」「お気に入りの1冊」「好きな作家」などの項目を設け、これをもとに参加者の自己紹介カードや名札を用意した。

当日は各自のお気に入りの1冊を持参の上、まずは1対1で自己紹介カードを交換しながら話してもらい、その後フリータイムを行った。連絡先の交換はフリータイムでもらうようお願いし、カップリングは行わなかった。

会場には参加者の好きな作家の本や小さいころに読んだ本のほか、占いの本やガイドブック、市内の観光パンフレットなども集めて展示した。参加者の中には展示していた本を借りたかたもいた。また、館内でもテーマ展示「あなたとわたし」をタイアップで実施し、結婚や身だしなみなど婚活に関する本を集めた。

参加者の感想としては大半が満足であったが、婚活にこだわらず「本について語り合える場」を求める意見もあった。今後は20代、30代が気軽に参加できる新たなイベントについても検討していきたい。



「としょ♥コン」会場ようす

### 「学生協働フェスタin東海」の開催

金城学院大学図書館 西尾十和子

学生サポーターを擁する大学図書館が増加し、2016年度には図書館総合展にて初の全国的な学生協働サミットが開催された。こうした中、昨年6月に開催したアンフォーレ（安城市図書情報館）にて、図書館総合展の地域フォーラムが開催されることを機に、東海地区で活動する学生サポーターが一同に会する本催事の開催に至った。本催事は、東海地区の私立大学図書館有志が主催し、サポーター同士の情報交換と交流を通して活動の更なる発展を図るとともに、総合展と併催することにより、多くの方に学生の取り組みを知ってもらう機会とした。

2017年9月23日（土）当日のプログラムは、学生サポーターによる活動報告・グループに分かれての交流会・活動を紹介するポスターセッションの3つを柱とした盛りだくさんな内容だった。開会に際し、この分野の牽引役としてご指導いただいている青山学院大学の野末俊比古先生による学生協働の歴史や意義、今後の展開についてのお話もいただき、学生が今までの活動を振り返り、その意義を考える良い機会となった。



学生交流会の様子

最終的な参加者は26機関113名となり、東海地区以外からの参加や、国公立大学や公共図書館の方にもご来場いただき、盛況の内に終えることができた。

参加者へのアンケート結果は、また参加したいとの回答が8割を超え、東海地区の大学図書館における今後の学生協働の更なる充実と、大学の垣根を越えた連携の進化を期待できる1日となった。

## 名古屋大学 ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

名古屋大学男女共同参画センター 榊原千鶴

2017年11月1日、名古屋大学東山キャンパスの南側、山手通り沿いに、名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL) が開館した。床面積840平米、鉄骨造2階建て、最大4万冊を収蔵できる図書スペースと書庫のほか、閲覧室、展示コーナー、研究スペース、レクチャールーム、カフェ等を備えた研究活動施設である。

建設は篤志家のご寄付による。また、公益財団法人東海ジェンダー研究所より、研究所の蔵書に加えて、同研究所顧問・水田珠枝名古屋経済大学名誉教授から研究所へ寄贈された蔵書(「水田珠枝文庫」)、研究所に縁のある方々からの寄贈図書約2万冊と史資料、およびアーカイブを寄贈いただいた。

2017年12月現在、登録作業の終了した約14,000冊



が書架に並び、今後もジェンダー研究をすすめていく上で必要な、女性を取り巻く歴史、社会、教育、理論など幅広い分野の和書・洋

書を収集、提供していく。

アーカイブとしては、東海ジェンダー研究所編『資料集 名古屋における共同保育所運動：1960年代～1970年代を中心に』(日本評論社、2016年)のために蒐集された約50年間にわたる名古屋市の共同保育所関連資料をはじめ、男女雇用機会均等法関連資料、アメリカ女性関連資料、イギリス性差別禁止・雇用平等法関連資料などを所蔵する。

利用は、ジェンダーに関心のある方ならどなたでも可能で、広く市民に開かれている。館内のレクチャールームを会場に、国内外の研究者による講演会やセミナーなども企画開催していくので、詳細はホームページにて確認いただき、来館、活用いただければ幸いです。



ホームページ:

<http://www.grl.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/>

## PICKUP①

### 研修「コレクションを活かす・魅せる ～社史・地域産業資料を中心に～」

H29/11/8



図書館は、特定の主題や分野の資料を集めたコレクションを所蔵している。図書館の財産ともいえるこれらコレクションをよりよく活かすにはどうしたらよいか、このことを考える研修会を開催した。

神奈川県立川崎図書館社史室は約1万8千冊の社史からなる、全国有数の社史コレクションを有している。同館司書の高田高史氏に「神奈川県立川崎図書館社史室の取り組み」と題し、その活動についてお話いただいた。情報誌「社楽」の発行や「社史ができるまで講演会」の開催、その年に刊行された社史を集めて展示する「社史フェア」など、多岐にわたる活動を紹介された。これらの企画は多くの来場者を集めているが、特に社史編纂に携わっている方々から好評だということであった。資料とそれを必要としている利用者をつなぐことが大切であり、アイデアのヒントは本や書架の中にある、という言葉が心に残った。

また、清須市立図書館長・野田嘉一氏より「日本一ビールに詳しくなるための図書コーナー」の開設で目指したもの」と題し、同館での先進的な取り組みについての報告があった。旅客機のパイロットであった野田氏は、図書館経営にビジネスと効率化の視点を導入し、様々な改革を行っている。地域の活性化が第一であるとし、清須市にキンビール名古屋工場があることから、「日本一ビールに詳しくなるための図書コーナー」を開設した。名古屋芸術大学も巻き込み、「産官学の連携」を打ち出している。コーナー開設後も常に新しいアプローチ方法を考えており、各図書館は地域に応じた特色を大切に、特色のない館はまずそれを創り出すべきである、とのことであった。

会場となった豊田市中央図書館にはクルマの街にちなみ、自動車に関する集めた自動車資料コーナーがある。同館の案内により、その見学も行った。

## PICKUP②

### 図書館講演会

### 岩瀬文庫と市民ボランティア

H30/1/13



当協会では、図書館振興事業として、広く一般市民に向けた講演会を開催している。今回は、岩瀬文庫主任学芸員・林知左子氏と岩瀬文庫ボランティアの皆さんをお迎えし、文化施設と市民ボランティアのより良い関係を考える講演会を開催した。

まず、林氏より、岩瀬文庫の歴史と現在、そしてボランティアの活動についてお話があった。

西尾市岩瀬文庫は、明治41年に西尾市の実業家・岩瀬弥助が、開設した私立図書館である。古典籍を始めとする8万冊を超える蔵書が無償で公開する、市民に開かれた文化施設であった。戦後、閉鎖の危機に迫られるが、文庫の存続を願う市民の運動に応え、昭和30年から西尾市が引き継ぎ、平成15年には古典籍の博物館としてリニューアルした。資料を「伝える」「活かす」活動を行っている。平成17年度からは岩瀬文庫ボランティアが誕生。現在、20代から70代までの60余人が、文庫の運営を支えている。このボランティアは「蔵書と並ぶ文庫の宝」とのことである。

続いて6名の岩瀬文庫ボランティアの皆さんも登壇し、どのような活動を行っているかを具体的にお話された。蔵書保存、講座サポート、本まつりの企画運営など、様々な活動が語られ、口々に「活動が楽しい」とおっしゃっていたのが印象的だった。

市民のために作られた文庫が、現在も市民に支えられている様子がよく分かる、楽しい講演会となった。

## 愛知図書館協会 会勢

(平成30年2月1日現在)

施設会員	93
公共図書館	64
専門図書館	4
大学図書館	22
その他	3
個人会員	57
賛助会員	10
計	160

## 事務局日誌 (平成29年1月～平成30年2月)

H29/1/19	【地域資料セミナー①】地域資料研修会 (愛知県図書館 以下県図)
1/26・27	資料保存研修 (県図)
2/5	第11回日図協東海地区会員のつどい (共催) (県図)
2/8	【地域資料セミナー②】デジタル化研修会 (県図)
3/2・3	統計研修 (愛知淑徳大学)
4/20	平成28年度会計監査 (県図)
5/17	理事会・総会 (県図)
6/2	研修委員会 (県図)
6/22	児童サービス研修① (県図)
7/14	児童サービス研修② (県図)
8/18	第54回愛知県学校図書館研究会大会 (津島市生涯学習センター：森会長出席)
9/8	児童サービス研修③ (県図)
9/29	レファレンスサービス研修① (県図)
10/12	児童サービス研修④ (名古屋市鶴舞中央図書館)
11/2	レファレンスサービス研修② (愛知学院大学図書館情報センター)
11/8	研修「コレクションを活かす・魅せる」 (豊田市中央図書館)
11/15	レファレンスサービス研修③ (県図)
11/24	児童サービス研修ステップアップ・ブックトーク (県図)
H30/1/13	図書館講演会 「岩瀬文庫と市民ボランティア」 (県図)
1/16	第2回研修委員会 (県図)
1/25・26	資料保存研修 (県図)
2/10	第12回日図協東海地区会員のつどい (共催) (県図)
3/1・2	統計研修 (愛知淑徳大学)
3/15	第2回理事会 (県図)

## 新館自己紹介

## 安城市図書館情報館の挑戦

平成29年6月1日開館



中心市街地拠点施設「アンフォーレ」外観

当館は、JR安城駅から徒歩5分の中心市街地拠点施設「アンフォーレ」内に平成29年6月に開館した。

アンフォーレはまちの賑わいを創出する施設で、1階にはイベントなどに活用できる広場や多目的ホール、カフェ、情報を発信する大型モニターもあり、敷地内にはスーパーマーケットも併設している。

図書情報館はアンフォーレ本館2～4階の3フロアで、吹き抜けを通じて1階の賑わいを共有するつくりになっている。本稿では、開館にあたり大きく変えた、言い換えれば“挑戦”した事柄をあげ、紹介としたい。

### ■ICT機器によるセルフサービス化

数々の最新ICT機器を導入しているが、中でも自動貸出機の充実、自動返却ポスト、予約本受取機の導入等で貸出・返却・予約本受取を原則セルフサービス化したのは、運用面で大きく変えた部分だ。



24時間受け取れる予約本受取機

当初、分かりにくいという声も多かったが、今は「便利だ」という声があるほど。そして何よりフロアスタッフの姿勢が変わった。以前はどうしても「カウンターに来る利用者」のみに目が行きがちだったが、自ら利用者に目を向け声を掛けていくスタイルに変わり、現にレファレンス件数も増えている。

### ■軽食・会話OK！

恐らく当館の最大の挑戦がこれである。1階の賑わいを共有し、特に中高生に気軽に来てもらいたい、という考えから「図書館の暗黙の了解」を破った。

そして開館後、投書として届く意見は「図書館なのにうるさい！」「本が汚れる」と批判ばかりだったが、潜在的には賛同者も多い印象があった。特に学生の来館が増え、勉強を教えあったり、資料を一緒に作ったりという姿をよく見るようになった。全体的な年齢層もぐっと下がった印象だ。彼らはカフェやスーパーで買った飲み物やお弁当、お菓子を持ち込んでいるが、汚損被害は増えていない。リラックスして過ごしているようだ。

さらに乳幼児の家族にも好評だ。子どもが母親に「これ読んで！」と声を掛けたり、泣き止まない乳児に保護者がお菓子をあげてなだめたりする。俗にいう「赤ちゃんタイム」を当館では毎日実施しているのだ。また当館は「本に親しみ、本を通じた親子の会話を促す」という理念を持っている。同様の図書館は他にもあるだろうが、この一見型破りなルールは、静かさを求めるより、よほど理念に合っていると感じている。



親子で気兼ねなく読み聞かせや会話ができる

- 所在地：〒446-0032 安城市御幸本町12番1号  
電話 0566-76-6111  
FAX 0566-77-6066
- 開館時間：午前9時～午後8時  
(土日祝は午後6時まで)
- 休館日：火曜日（祝日は開館）、第4金曜日  
年末年始、特別図書整理期間（5日以内）
- アクセス：JR安城駅徒歩5分
- ウェブサイト：  
<https://www.library.city.anjo.aichi.jp/>